ェルノブイリ原発事故以前から，抱いておられたのであろうと，私たちは推察しています。原子力発電に頼る必要がなくなる，というよりは，むしろ，原子力発電の出番はなくなるといった，貴殿と同じような意見は，世界中で高まってきていました。であればこそ，チェルノブイリ原発事故の衝撃をきっかけに，ヨーロッパの国々を中心に，「脱原子力」の動きが，急速に高まってきたのだと思います。

原子力発電推進の世界的な総元締め役の，国際原子力機関（ＩＡＥＡ）の事務局長ブリックス氏は，チェルノブイリ原発４号炉の惨状を目のあたりにした後に，貴殿もよく御存知のように，「原発推進諸国は，もはや，引き返せない所に来てしまっている」と，ヤクザまがいの脅し文句を並べました。こうした没論理で，捨てばち的な態度で，ただでさえ危険な原発の建設・運転を強行すれば，それこそ，第２，第３の，スリーマイル島事故やチェルノブイリ事故を招くことになると，私たちは考えています。

そのことは，貴社が，これまで予定していたことだから，といった姿勢で進められようとしています伊方３号炉にも，そのまま，あてはまるでしょう。私たちが見るところでは，経営的にも決して楽でない貴社が，一方で，燃料電池や太陽光発電などの新しい電源の開発を進めながら，他方で，時代遅れとなりつつある巨大な電源の原発も，これまで通りに進めていくというのは，どだい無理なことではないかと思われます。

原発の危険性を高めるような，社会的，経済的環境への配慮を欠いて，原発を建設し，運転することが，大災害を誘発するということはすでに，米ソ両原発先進国における二つの大事故によって，十分に示されています。

貴殿や貴社の一存で，伊方３号炉の将来を左右できないほど，大きな外圧が存在していることは私たちも理解しています。しかし同時に，とくにチェルノブイリ原発事故のあとでは，人々の原発に対する信頼と期待は，以前と比較できないほどに崩れ，「脱原子力」を目指す運動が，世界的に着実に広がり高まってきていることも見落してはならないと思います。

貴殿が，公に表明された明快な見解に従って，何よりもまず，取りかえしのつかない大災害を未然に防ぐために，無謀な伊方３号炉の建設を，勇気をもって中止されるよう，私たちは，再び，強く勧告します。

会計報告（'86.10/4～10/31）

収　入	
会　費	14,000
ニュース購読料	125,700
カンパ	3,000
計	142,700
支　出	
ニュース印刷費	25,000
郵送料	9,550
振替手数料	640
資料費	490
事務用品費	6,500
ゼロックス	
リース料	14,300
ヨピー料	26,224
計	82,704
差　引	59,996
積立金合計	643,954

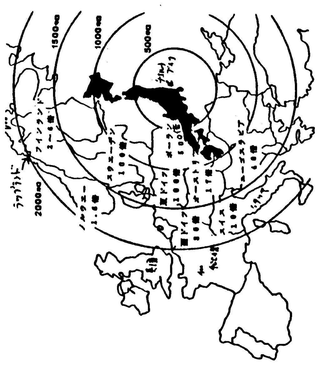
伊方訴訟ニュース

第159号

1986年11月15日

伊方原発訴訟を支援する会　連絡先〒530 大阪市北区西天満４－９－15 第一神明ビル
藤田法律事務所☎06-363-2112 口座 大阪3-48780

今も続く連原発の放射能被害


2000㎞
1500㎞
1000㎞
500㎞
ラップランド
アイスランド
ノルウェー
スウェーデン
フィンランド
ソ連
ポーランド
ドイツ民主共和国
ベルリン
ドイツ連邦共和国
ボン
ハノーバー
ケルン
ベルギー
ブリュッセル
オランダ
アムステルダム
ロンドン
イギリス
パリ
フランス
ジュネーブ
スイス
ローマ
イタリア
ウィーン
オーストリア
ブダペスト
ハンガリー
ルーマニア
ブカレスト
ブルガリア
ソフィア
ユーゴスラビア
ベオグラード
アルバニア
ギリシャ
アテネ
トルコ
アンカラ
ジュネーブ
ローザンヌ
ミュンヘン
ウィーン
ベルン
ミラノ
ベニス
ローマ
ナポリ
ジェノバ
ニース
マルセイユ
リヨン
ストラスブール
ケルン
ハノーバー
ベルリン
ハンブルク
ロンドン
ブリュッセル
ジュネーブ
ローザンヌ
ベルン
ミュンヘン
ウィーン
ブダペスト
ブカレスト
ソフィア
ベオグラード
アテネ
アンカラ
ローマ
ナポリ
ジェノバ
ベニス

再度の

拝啓　四国電力社長殿

「原子力の時代は終った」との見解を行動で

さる2月15日付の本ニュースに，貴殿あての「それでも3号炉を作るのですか？」との一文を掲載しましたが，恐らく，貴殿の目にも止まったのではないかと推察しています。

あの手紙の中で，電源開発会社の松浦石炭火電1号（100万キロワット）からの電気を買うよう押しつけられた貴社の前社長が，「需要のない電源を建設することの方がおかしい」と，激怒されたことを，私たちは評価し，その言葉通りに，貴殿が，無謀で危険な伊方3号炉の増設を断念されるよう強く勧告しました。

あの手紙から約2ケ月後に，チェルノブイリ原発事故が起こり，国境を越えて襲来した大量の“死の灰”は，世界中の人たちに，原発の恐ろしさを事実をもって教えました。そして，その“死の灰”のために，こんご，数万人から数10万人のガン死者が出ると予想されているヨーロッパの国々を中心に，原子力に頼らない途を選ぼうとの機運が高まり，各国政府の政策に具体的に反映されてきていることは，貴殿も十分に御存じのことと思います。

しかし，まことに奇妙なことに，世界で唯一の被曝国といわれているこの国で，8000キロも離れたチェルノブイリからの“死の灰”が舞い下り，しかも，事故の詳細はもちろんのこと，その概要さえ，なお五里霧中といった情況の中で，さる5月1日，原子力安全委員会が，貴社から申請中の伊方3号炉の建設計画に対し，「安全である」とのお墨付きを与えるという暴挙が行われました。そしてそれに続いて，ソ連原発事故から，ちょうど1ケ月目の5月26日には，通産大臣も，貴社に対し，伊方3号炉建設の許可を与えてしまったのです。

政府のこうした措置には，伊方原発周辺地域の住民はもちろんですが，恐らく，貴殿も仰天されたのではないでしょうか。貴殿ならびに貴社としては，チェルノブイリ原発事故の発生のおかげで，伊方3号炉の建設が先送りとなり，一息つけると，内心ひそかに期待しておられたのではないかと，私たちは「下司の勘ぐり」で推察していました。しかし，原子力行政にとっては，貴殿らの思惑がどうであれ，「ソ連原発で何が起ころうとも，断固として原発建設を推進する」との雄々しい決意を，国内はもちろん，国外にも示すことが必要だったのでしょう。

その後，私たちは，貴殿や貴社の動向に注目していましたが，果せるかな，電力業界誌の一つの「エネルギーフォーラム」誌（電力新報社発行）の6月号に，貴殿が心中を吐露しておられることを知りました。それは，電力新報社の酒井社長との対談をまとめて掲載された「21世紀への経営展開を指向する四国電力」と題した記事の中での，貴殿の率直な発言です。

その発言の中で貴殿は，まず，四国地方の電力需要が，産業構造の変化で，こんごも伸び悩み，貴社の経営が苦しくなることを案じておられます。

「エネルギーフォーラム」誌の同じ号には，昭和61年度の各電力会社の「電力施設計画」という記事が掲載されています。それによりますと，貴社は，こんご10年間の販売電力量の伸び率を，年平均2.8％，数年前の半分以下と予想しています。そして，同じ記事の中で，貴社の近藤取締役は，「今後とも電気温水器をはじめとする深夜需要の造成や，通年需要の開発に，一段と努力していくこととしている」と，ただでさえサイフのヒモの固い一般利用者に，何とか電気を売りつけようと，悲荘な決意を披歴しておられます。

しかし，さすがに貴殿は，より現実的に，「大口の（需要の）伸びが本当にだめなんです」とか，「2.8％（の需要の伸び）は現時点で考えると，大丈夫かなと危惧している」とか，率直に認めておられます。さらに，産業構造の変化については，「ハイテクの分野と，経済のソフト化とかサービス化とか，第三次産業の分野で」と言っても，「それらは電力をあまり使わない寡消費型」と，クールに受けとめ，「電気事業にとっては，質的にも問題があるような産業構造にだんだんなってくる」との見通しをのべておられます。

事実，今年度上期（4－9月）の電力需要は，貴殿が記者会見で「創立以来の落ち込み」と嘆かれたように，6.7％減と，九電力会社中でも最高の落ち込みとなっています。

貴殿の予想は適中してきていますが，残念ながら貴殿は，肝心の伊方3号炉については「こうした需要の状態ですから，伊方（3号）の89万キロワットが出来ますと，あとはあまり急がなくともいいと思っております」と，まるで他人事のように発言しておられますね。もし3号炉が出来れば，「供給予備率」が，20％にもなるという異常さに，気付いておられないはずはないでしょうに。もっとも，今となっては，貴殿の力ではどうしようもないというお気持もよく分りますが。

ところで貴殿は，酒井社長の問いかけに答えて，21世紀にかけての明快な展望を披歴しておられますね。少し長くなりますが，その部分を引用させてもらいます。

「設備的には，スケールメリットの追求，大電源の時代は終わったんじゃないか。あとはオンサイト型（編集部注；消費場所に発電設備を作ること）の分散型が出てきますよね。いま一番近道にいるのが燃料電池発電で，それに続くのが太陽光発電。もう一つは石炭をガス化してのコンバインド・サイクル発電です。こういう新しい発電方式が試験研究を経て実用化の時代を迎える」と。

21世紀と言っても，あと15年もない先のことですが，その頃になると，原発の出番が無くなるというのが，貴殿の展望の最も大事な点だと思います。こうした見解が，関西電力と並んで，現在，最も原子力発電の割合の大きい電力会社，四国電力の社長である貴殿から表明されたことの意味は大きいと思います。

さる8月，原水爆禁止をかかげたある集会の席上で，貴殿の対談記事が紹介されました。そうしますと参加者から，「それは本当に，四国電力の社長の言葉ですか」という質問が出されましたが，そうしたことも，貴殿の見解の新鮮さを証明しているのではないでしょうか。

また，貴殿のそうした見解は，恐らく，チ